

私は「地域に根ざす」ということをもう二〇数年来主張してきましたが、それは決して地域セクト主義的な意味で「地域さえよくなれば」ということではないし、さりとて「国がよくなれば地域或いは個人がどうなってもよい」という考え方も勿論相容れないわけです。そういう地域と全体との関係をどう考えたらよいか、地域主義と民主主義との関係をどう理解したら

よいか、その問題と教育との関係をどう関連づけて理解したらよいか、そこに触れる余裕がなくなりました。日頃考えていることの一端を述べた次第です。そういった点も今日から明日にかけての集会の中で、皆さんで話し合っていただければ幸いです。あきらかにいがた県民教育研究所会長・新潟大  
学名誉教授)

〔表紙のことば〕

### 集団登校

那須 高明

ある朝、登校する小学生の一団と一緒の道を歩いた。いろんな学年の入りまじったその集団は、年齢に関係なしにいくつかのグループになって、お喋りしながら学校へ急いでいる。下級生のお喋りを受けとめながら、上級生はちゃんと班のまとまりと安全に心を配っている。このような子どもたちの姿はごく当たり前な日常的な光景なのかもしれないが、私はとても新鮮な、感

動に似たものを覚えた。子どもたちの多くは一人ひとり孤立し、テレビやパソコンといった機械やゲーム機器だけが対話の相手といった状況に放置されている。心からの友達が作れない、教師となかなか話もできない生徒が実に多い。子どもは、もっともっと子ども同士が素肌でつきあう時間、空間が必要だし、それを保障するのは大人の義務であろう。考えてみれば登校時は子どもたちの人間づきあいのめったにない貴重な場になっているのかもしれない。このような人間的にふれあう時間が子どもたちに豊かに恵まれることを願いながら、この表紙を描かせてもらった。

(なす こうめい 長岡大手高校)